

ぶらす

出居清太郎ワールドへのご招待

No.101
2015・秋

思いやりの心が行動に

(1) 愛があれば

ある婦人に、「ご主人を送りに玄関まで出て行ったとき、いつも帽子を掛けてある釘に帽子がかかっていたいなかった。あなたのご主人が『帽子がないよ』と言ったとき、『ええありませんね』と言っているだけではならない」とお話したことがある。これはないものはない、あるものはある。これは正直なことである。正直ではあるが、正直なだけである。愛がない。愛があれば、ありませんねと言っている間に、もう立つ

て探しに行くはずだ。

(出居清太郎先生の言葉から)

似たような状況はよくありますね。同じ電車に乗る友人と駅で一緒になった。こちらは大きい紙袋を三個持っていた。友人は「荷物が多いね」と言って、スタスタと先に歩いて行った。やはり、「一つ持ちましようか」と言ってほしいですね。知人の家を訪ねたとき、夕立に遭った。その家に着いて、「夕立に遭って濡れてし

まいました」と言つと、「あらたいへん」と言つより早く、タオルを持ってきてくれた。うれしいですね。

つまり相手に対する思いやりの気持ちが行動に現われます。

正直といえば機械で、たとえば乗車駅で改札機を通さなかつた切符で、下車駅で改札機を出ようとすると、改札機が閉まつて出られません。駅員さんのいる通路に行つて切符を見せると、すんなり通してくれま

す。機械は正直で、それでいいわけですが、なにか冷たい感じもします。人は機械ではないわけですから、正直というだけでなく温かみがほしいですね。

次の会話はどつどつと

「この花はなんぞでしょう」

「知りません」

花の名前を聞かれて、知らないから「知らない」と言った。それは確かに正直ですが……。会話はそれでとぎれてしまいます。花の名前を知らなくても、「なんの花でしょうね。いい香りがしますね」と答えれば、「そうでしょう、だから名前を知りたくて。あなたは何の花が好きですか」といふふう

に会話がつながっていきます。いずれにしても、相手に対する思いやりの気持ちが大事ではないでしょうか。相手の状況や気持ちを察し、相手が望むような相手の心がなごむような、元気になるような言動で接していくようにしたいものです。

(2) 品物を、合掌して迎え、送る

商店に行ってみますと、品物が送り届けられる時に遭うことがあります。見ていると、主人も使用人も、邪魔ものが入ってきたというわけでもないでしょうが、置き所もないのに困ったなあという顔をして、「そのへんに置いて下さい」と言っております。

その品物が動かねば商売が成り立たないのに、邪魔者扱いをしています。これは品物がうまく回転していかないのは当たり前でしょう。

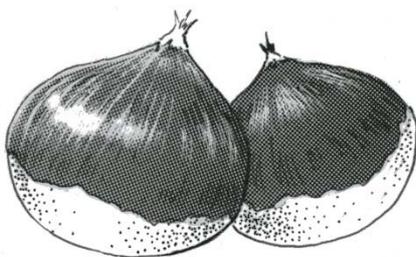
入ってきた品物をまず合掌して迎える。これが誠のわざではないでしょうか。出て行く品物を合掌して見送る。これが誠の心ではないでしょうか。品物の一つ一つに誠の念を通わせてはじめて、品物がまことの

働きをするのであります。

(出居清太郎先生の言葉から)

合掌して品物を受け入れ、合掌して送り出すということなど、思いもつきませんが、品物に対して、合掌するよつな気持ちを持てるとすれば確かにすばらしいことではないでしょうか。

物を大切に、ということとは小学校でも教えられることですが、物に合掌するという



カット・齋藤啓子

のは、それとは次元の違うことのように思われます。

単に、汚さないとか、壊さないといった表面的なことではなく、そこには物そのものへの敬愛というものがあるのではないのでしょうか。

品物は多くの人の勤労の結果としてあるものです。合掌は、その多くの人々の勤労に対する感謝と敬意を表わすものともいえるでしょう。

さらには、物の存在を人間の存在と同じようにみて、その存在自体に対する敬愛を表わすものともいえるのではないでしょう。

編集後記

今年の7月は本当に暑かったですね。これでは8月はどうなるだろうと思っていたら、急に涼しくなって、やれやれよかったです。9月には関東・東北に大雨・洪水。皆様のご健勝をお祈りします。

本誌は前号から新出発しました。どうぞご愛読・ご活用ください。

次号は来年3月1日発行です。(H・Y)

平成 27 年 10 月 1 日発行 ふゆのあり 670 号付録 ぷらす α 平成 27 年秋号(通巻 101 号) 編集人 山本博也

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1 修養団捧誠会壮青少年委員会 TEL03-3971-1493